

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(十)

植 木 久 行

●二〇八番 白居易「蘇六に答ふ」「但喜暑隨三伏去、不知秋送二毛來」

○大和三年(八二九)、作者五十八歳、東都洛陽での作(花・朱)。太子賓客分司⁽¹⁾在任。『六注』や書陵部本『朗詠抄』等は、詩中の「二毛」を、潘岳の「秋興賦」⁽²⁾序を踏まえた三十二歳の意として捉え、本詩を「白樂天三十二ノ年作ル也」などというが、もちろん誤りである。「二毛年」として始めて三十二歳を意味するのが通例である。「蘇六」は、長慶年間(八二一〜八二四)の末から交遊⁽³⁾し、同じ東宮官に在職したこともある酒飲み仲間の蘇弘(岑仲勉『唐人行第錄』を指す。白詩「會昌二年(八四二)の春、池西の小樓に題す」(卷36、後集卷17)の「蘇・李は冥濛⁽⁴⁾して燭に隨ひて滅え、陳・樊は漂泊⁽⁵⁾して萍に逐ひて流る」に對する原注に、「蘇庶子弘と李中

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(十)(植木)

丞道樞(開成四年(八三九)、浙東觀察使在任中に没)、及び陳(結之、蘇州時の歌妓)・樊(素、洛陽時の歌妓)の二妓は、十餘年中、皆な(履道里の自宅内の)樓中の歌酒中の伴⁽⁶⁾にして、或いは歿し或いは散じて、獨り子のみ⁽⁷⁾在り」という。蘇弘は遅くとも會昌二年以前、おそらく開成年間(八三六〜八四〇)前後に没したのであろう。庶子は東宮府の正四品の侍從官(太子左春坊の左庶子二人⁽⁸⁾「正四品上」と太子右春坊の右庶子二人⁽⁹⁾「正四品下」に分かれる)であり、東都分司の職を指す。大和元年(八二七)から大和三年に到るところ、蘇弘はこの官に在任したらしい。朱『箋校』卷二五、「答蘇庶子」の條には、蘇弘は藍田(京兆府所屬の縣、都長安の東南郊)の人で、蘇端の子、歴官不詳とあり、さらに『新唐書』卷一五九、盧坦傳に見える蘇彊の兄の弘のことかとする。この推定は羅『年譜』三六三

中國詩文論叢 第十六集

頁もほぼ同じであり、いずれも唐の林寶撰『元和姓纂』卷三、十一模、蘇の「蘇端、藍田人、生弘」を踏まえる。本條は七絶の前半で、「漸く老境に近づいた作者の心境を賦す」(大曾根注)。

○〔但喜〕 釋慧琳『一切經音義』卷二七に引く『聲類』(魏の李登撰)に、「但、徒也、徒空也」とある。『和漢朗詠集假名注』に、「吾カ老ヌルヲ知ラ不シテ、偏ニ暑ノ去ルコトヲノミ、願フヲ云也」という。本條の發想は、別の白詩「立秋の夕べ、涼風忽ち至り、炎暑稍や消ゆ、卽事詠懷……」(卷36、後集卷4)に、「但だ煩暑の退くを喜び、光陰の催すを惜しまず」(66歳の作)とほぼ同じ。また語法的には、「不憂頭似雪、但喜稼如雲」(與諸公同出城觀稼)卷28、後集卷10)とも類似する。ちなみに川口文庫本は、本條の主語を「人は……」と譯するが、前掲の白詩「立秋夕……」等を参照すれば、作者自身の述懐であらう。

○〔三伏〕 晩夏の六月から立秋後にかけての、一年で最も暑い約三十日間を指し、「伏日」「三庚」などともいう。古くから「最熱三伏天」の諺が廣く流布する。⁽⁶⁾『白氏六帖事類集』卷一、伏日、三伏の條に引く『陰陽書』に、「夏至より後、第三の庚を初伏となし、(十日後の)第四の庚を中伏と爲し、

立秋後初めての庚を後伏と爲す」とあり、これが狹義の三伏の日である。また同條に引く『曆忌釋』⁽⁷⁾には、夏から秋への季節の推移と陰陽五行説(この場合、水・火・金・木・土の五行相剋〔相勝〕説)とを關連づけて、命名の由來を説明している。「立秋(に至りては)、金(秋を象徵)を以て火(夏を象徵)に代ふるなり。金は火を畏る。故に庚の日に至れば、必ず伏す。庚とは金なり。故に伏日と曰ふ」と。伏はまた、夏至も過ぎ、秋を迎えて、陰氣が起ころうとするが、まだ盛んな陽氣のために押えこめられる意ともいう。唐代、三伏の日には、それぞれ一日休暇となった。平岡武夫『唐代の曆』によれば、本年の初伏は六月十二日、中伏は二十二日、後伏(宋伏)は七月二日となる。本詩はおそらく、後伏後の初秋七月の作であらう。この意味で『千載佳句』や『和漢朗詠集』が「早秋」部に収めるのは穩當である。白氏の用例は、さらに五例あり(『索引』)。「竹窓」詩の「是の時 三伏の天、天氣熱くして湯の如し」(卷11)は、三伏時の猛暑を端的に表現する。拙著『唐詩歲時記』(講談社學術文庫)二〇六頁以下も参照。

○〔不知……〕 ……に氣づかないでいる。↓いつのまにか、知らず知らずのうちに……になるといった氣分。本條と似た發想

は、早くも「曲江にて秋に感ず」（卷9、38歳）詩の、「暗かに老いて自ら覺らず、直ちに鬢の絲を成すに到る」の中心にうかがわれる。

○「秋」 萬物の凋落する季節と、衰老する人生（肉體）の晩年（白髪のお境）とをあわせた表現。前稿二〇四番の「秋」参照。

ちなみに、世尊寺伊行筆本の⁽¹⁰⁾「不知秋……」を「不老知……」に作る。この異文に關して、木藤智子「平安時代における『和漢朗詠集』の書寫と享受⁽¹¹⁾」は、次のごとくいう、凋落の季節としての秋が、人生の秋—老境と結びついた發想の下に生まれ、『秋が来るのを知らずにいる』という詩句の内容を、『老いが来るのを知らずにいる』と言い換えた、言わば解釋本文である」と。この指摘自體は穩當であろうが、ただ「不老知……」では句を成さず、明らかに「不知老……」の誤寫であろう。白詩「新秋」（卷18）にも、「二毛 鏡に生ずる日、一葉 庭に落つる時」と歌う。

○「二毛」 忍びよる老衰のきざしとしての白髪。西晋の潘岳「秋興賦」序の用例が最も有名であるが、古くは『左傳』僖公二十二年や「禮記」檀弓篇下に、戰爭時の掟として「二毛を禽へず」「二毛を獲へず」などと見える言葉であり、そ

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂（植木）

れぞれ「頭白くして二色有り」（杜預）、「鬢髮斑白」（鄭玄）などと注されて、ごましお頭の老人を意味する。ここでは、白詩「羅子」（卷16）に「我 今年已に長じ、日夜 二毛新たなり」とも詠まれるごとく、白髪に重點を置いた表現である。「羅子」詩に對する岡村繁『白氏文集』3（竹村則行執筆）の注に、「第二の毛髮。白髮」とあるが、二毛の原義は「第二の毛髮」というよりは、やはり白と黒の二色が入りまじった頭髮を指そう。もちろん、「白髪之二筋生ひたりしこと」（⁽¹²⁾『集注』等）を指すわけではない。「二毛」の用例は、本句を含めて十例。

○「側對」 本條は平明な對句（七絶の前對格）であるが、『和漢朗詠集假名注』は鋭く分析して、「對ハ、毛ト伏ト也。伏ノ字ノツクリ、犬ナル故ニ、片側對也」という。この點は、すでに『六注』にも「對ハ、毛ト伏トノ對ナリ。伏ノ字ハ、ツクリ犬也。毛ノ字ハ、獸ノ毛也。心對也」とある。これは、對應する二字の意味は本來無關係であるが、一字もしくは二字の「側」（字形の一部・片側、偏や旁など）が意味的な連關をもつ場合を指し、「側對」（初唐の元兢『詩髓腦』、「字側對」（初唐の崔融「六五三〇六」『唐朝新定詩格』）などと呼ばれる對偶の一種である。片側對はその別稱であり、心對も同

中國詩文論叢 第十六集

意であらう。詳しくは、空海『文鏡秘府論』東卷「二十九種對」のなかの「第十七 側對」の條¹³⁾参照。

●二〇九番 白居易「祕省の後廳」「槐花雨潤新秋地、桐葉風涼欲夜天」

○大和元年（八二七）、作者五十六歳、都長安での作（花・朱・羅・王）。祕書監在任。作成年代は南宋の陳振孫「白文公年譜」以來の定説であり、詩中の「新秋」によれば、本年七月の作。やや後の十月に成る「三教論衡」（卷68）中に見える官銜は、「中大夫、守祕書監、上柱國、賜紫金魚袋」である。中大夫は從四品下を表す文散官、祕書監は從三品の職事官である。職事官の品階が散官のそれより高いので、守の字が加えられる。上柱國は正二品の勳官、賜紫金魚袋は紫衣（紫袍）と金魚袋の着用が特別に許可されていることを示す。というのは、身につける「章服」（位階や等級を識別できるしるしをもつ禮服）は、散官の品階にもとづくので、本来なら緋衣（深緋）と銀魚袋なのである。紫衣・金魚袋は、重臣や高官を表示するシンボルとして注視された。

大和元年、文宗は宦官に殺された敬宗のあとを繼いで即位した後、穆宗・敬宗二朝間の弊風を改めるために、人望ある

人々を都長安に召喚した。前蘇州刺史の白居易も宰相の裴度や韋處厚の推薦を拒みきれず、同年三月十七日、若いころ校書郎として仕えた祕書省（宮中所藏の貴重な典籍を管理し、重要な文書を保存する役所）の長官「祕書監」を拜命する。¹⁵⁾そして東都洛陽を離れて、長慶元年（八二二）、五十歳の春に購入して一年半ほど過ごした街東の新昌坊内東端の自宅に再び住んだのである。祕書監は一員、從三品の名譽あるポストで、「邦國の經籍圖書の事を掌る」（『大唐六典』卷十）が、宰相の病坊¹⁶⁾と蔭口をたたかれたように、政界の動きから最も離れた、實權のない閑職であった。

詩題の「祕省」は祕書省の略。長安城内の中央北部に置かれた官廳街「皇城」内の西側にあった。後廳の語は本詩の轉句にも「盡日後廳無一事」とあり、「官廳の後さしき」（高木正一）、「祕書省の後方にあった堂屋」（田中克己）、「官廳の奥の間」（内田泉之助）などと注され、詩は庭さきの風景を詠むが、その詳細は不明。あるいは隋の大業年間（六〇五〜六一八）、祕書郎の虞世南が現存する最古の類書『北堂書鈔』を編纂したゆかりの「後堂」（＝北堂）のことか。唐の劉肅『大唐新語』卷八、聰敏¹⁷⁾第十七には、

（虞世）南爲祕書監、於省後堂、集群書中奧義、皆應用

者、號『北堂書鈔』。今此堂猶存。

とあり、ほぼ同文が唐の劉餗『隋唐嘉話』巻中にも見える。

○「槐花雨潤……」地を満む 槐花の秋（白詩「永崇里觀居」巻5）とも歌われる、黄色い落花の埋める光景。それを初秋の雨がつややかにしっとりぬらすさま。『和漢朗詠集假名注』に、「槐花トハ、エンジュノ花也。新秋ハ、七月也。エンジュノ花ハ、七月ヨリ落ル。殊ニ雨ノ濕フ時、落レバナリ」とあり、書陵部本『朗詠抄』にも、「槐花ハ、七月ニ落ル也。雨ノフル時、殊ニ落也。故ニ雨潤ト云リ」という。槐は清の汪灝ら奉勅撰『廣群芳譜』巻七四に、「四、五月、黃花を開く。……七、八月、實を結び莢を作りて、連ねし珠の如し」と記されるように、槐花は夏の花であり、「槐夏」の語もある（『漢語大詞典』四）。白詩中にさらに十三例あるが、「夏夜宿直」（巻19）の「槐花院に滿つる氣、松子階に落つる聲」は、その一例。この意味で、國會圖書館本『和漢朗詠注』に「槐花ト者、此花ハ七月ニサク也」とあるのは誤りであろう。何慶善・楊應芹『羅鄴詩注』「槐花」詩の條に、

槐有多種、大都春末開白花、唯有黑槐則秋初開黃花、故白居易有「槐花雨潤新秋地」之句。

という説にも従いたい。

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(+) (植木)

ところで中國原産のママ科に屬する落葉喬木の槐樹は、中槐・國槐とも呼ばれ、關中地區を代表する「郷土樹種」。栽植が容易で成長も早いうえに、壽命が長くて虫害も少ない。そして葉が青々と茂つて涼しい木陰を作る。當時の街路樹は槐・楊柳・楡などであったが、なかでも槐樹（青槐）こそ都大路を美しく彩り、「綠槐十二街」（十二街は都大路、韓愈「南内朝賀歸呈同官」）、「長安十二槐花の陌」（韋莊「驚秋」）、「落日長安の道、秋槐滿地の花」（晩唐の李壽の逸句）などと歌われる。とりわけ皇城内を南北に走る「天街」（承天門街）のみことな槐の並木道は、長官に拜謁する官僚たちの整列を思わせ、「槐衙」とも呼ばれた。

初秋の七月は、黄色い槐花の散りゆく季節である。晩唐の詩僧子蘭の「長安早秋」詩に、「風は槐花を舞はして御溝に落とし、終南の山色、城に入りて秋なり」という。都長安における白詩「翰林院中にて秋に感じ、王質夫を懷ふ」（巻9）にも、「宮槐に秋意有り、風ふく夕花紛紛たり」とあり、初秋、洛陽での作「秋涼閑臥」詩（巻29、後集巻3）に、「薄暮宅の門前、槐花深さ一寸」という。そして地面いちめんに散りしく黄色い光景は、「靜かに任す槐花の地を満めて黄なるに」（白詩「春早秋初、因時即事、……」巻32、後集巻13）

中國詩文論叢 第十六集

などと詠まれる。田中克己『白樂天』の譯「エンジュの白い花」は、誤解を招く。

○〔潤〕 今一般に「雨に潤う」（高木正一・西村富美子など）と讀まれるが、やはり「雨潤す」（佐久節）と讀むべきであらう。これと對になる後句の「風翻」も、「風に翻る」ではなく「風翻す」と讀みたい。ちなみに、『私注』『集注』『和漢朗詠集假名注』『貞和本和漢朗詠集』などには、潤を「濕」に作るが、これは同訓の類義語に引きずられた誤寫であらう。柿村『考證』に、

是『私註』誤寫し、『集註』以下、其の誤なるを察せずして之を襲ひしのみ。何となれば、『私註』本句には濕字に作れども、其の註には雨潤之意可案之といへばなり。

という。潤は「につとりと汁氣をもたすこと」（皆川淇園『虛字解』。『易』説卦傳に、「風以て之を散じ、雨以て之を潤す」とある。

○〔新秋〕 「七月也」（『六注』）。白詩の愛用語、本例を含めて二十三例。

○〔桐葉〕 明の李時珍『本草綱目』卷三五は、東洋特産の落葉喬木「桐」を、大きく①桐（白桐・黄桐・泡桐・椅桐・榮

桐）と②梧桐の二種に分け、木村康一代表『新註校定國譯本草綱目』⁽²⁵⁾は、①をゴマノハグサ科（玄參科）のシナギリ（新稱）、②をアオギリ科（梧桐科）のアオギリとする。細かな分類の比定は困難であり、「諸家ノ數說、遂ニ歸一セズ」（江村如圭『詩經名物辨解』卷3、椅）という。岡不崩『古典草木雜考』⁽²⁷⁾にも、「古來梧桐と白桐とは、相混同せるが如く、何れも總稱して梧桐といひ、我國にありては、これをキリと訓めり。されば萬葉集にある梧桐は、今のアラギリに非ずして、白桐又は紫桐花なりとす」とあり、白桐・紫桐花は「和俗キリ」と同屬であらうという。中國古典詩文の桐は、童勉之『中華草木蟲魚文化』⁽²⁸⁾に指摘されるごとく、主に(a)鳳凰の棲息する樹、(b)琴を作る良材、(c)秋の訪れを知らせる使者、の三種に用いられ、白桐よりも梧桐を指す場合が多い。⁽²⁹⁾『六注』に「キノハ也。秋風ハ、必スタニ來ル。桐ノ葉、殊ニ餘木ヨリモ、風ソヨク故ニ、桐葉涼ト云ヘリ」というが、佐久譯に「梧桐の葉」とあるごとく、シナギリ（白桐・紫桐花）ではなく、秋の到來とともに、その大きな葉を一枚一枚散らせて凋落の秋を象徴する梧桐を指すと考えたい。本句は「夕の空に桐の葉のうち戦ぐ音」（『集註』）も暗示され、『六注』の指摘も参考になる。

『廣群芳譜』卷七三、桐の條には、

梧桐、一名青桐、一名楓、皮青如翠、葉缺如花、妍雅華淨、賞心悅目、人家齋閣種之。…立秋之日、如某時立秋、至期、一葉先墜。故云、「梧桐一葉落、天下盡知秋」。

とある。南宋の都臨安（浙江省杭州市）の繁昌記、吳自牧撰『夢梁錄』卷四、「七月立秋附」の條によれば、あらかじめ宮中の庭に梧桐を植えておき、立秋の日に係り官が天子に向かつて秋の到來を奏上すると、その聲に應じて梧桐の葉が一、二枚飛び落ちて「秋を報せる」しかけになっていたという。この凋落のイメージは、南宋末の陳元靚『歲時雜記』卷三、秋、一葉落の條に、

『淮南子』⁽³⁰⁾「一葉落、而天下知秋」。韓文公（愈）詩（祖席）の「秋字」詩云、「淮南悲葉落、今我亦傷秋」。唐人詩云、「山僧不解數甲子、一葉落知天下秋」。韋蘇州（應物）「送榆次林明府」⁽³¹⁾云、「新秋一葉落」。

と記される「一葉落つ」とも重なりあう。白詩「新秋病起」⁽³²⁾（卷20、後集卷5）に「一葉梧桐落ち、年光半ば又た空し」とあるのは、梧桐が秋の訪れとともに散りゆくゆえに、その落葉の始まりは、半年が過ぎたことを実感させるわけである。韋應物の「新秋寄諸弟」詩の「高梧一葉落、空齋歸思

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂（十）（榎木）

多」、晚唐の李鄩「早秋書懷」詩の「高梧一葉墜涼天、宋玉悲秋淚灑然」なども参考になる。⁽³³⁾「郡廳に樹有り、晚く榮きて早く凋む。人は名を識らず、因りて其の上に題す」という白詩（卷10）の「秋は梧桐に先だちて落つ」は、「秋還りて遽かに已に落つ」⁽³⁴⁾（沈約「詠梧桐」）る梧桐のイメージに支えられている。

○「風涼」『文集』卷二五（後集卷8）には「風翻」に作る。翻は身をひるがえして、ひらひらと飛ぶこと、あるいはひらひら、ばたばたとゆれ動く意。『一切經音義』卷六九、飄騰の條に、「『廣雅』「飄、飛也」、顧野王（玉篇）云、「飄、高去也。…亦作翻」とあるが、ここでは枝葉がしなやかで、秋風に吹かれて盛んにゆれ動き、わびしい葉ずれの音をたてる梧桐を描寫し、時にははらはらと飛び散る姿も含まれよう。

ちなみに、「涼」の異文は、すでに『千載佳句』四時部・早秋の條（金子彦二郎校本・松平文庫所藏本）にも見えるが、對句構成（七絶の前對格）からいっても、やはり「翻」字が『文集』本来の文字であろう。わが國で恣意的に改變された理由については、三木雅博『和漢朗詠集』平安古寫本の佳句本文の改變をめぐって―朗詠―のもたらししたもの⁽³⁵⁾の中に、

中國詩文論叢 第十六集

「早秋」という時節においては、「桐葉 風に翻る」という原詩の本文は、平安朝の人々にとってまさに『少し荒く』思われたためであらうとし、續いて次のごとく分析する。

當時の人々がなじんでいた「早秋の風」は、「河風の涼しくもあるか 打ちよする波と共にや秋は立つらん」(『古今集』秋上、「にはかにも風の涼しくなりぬるか 秋立つ日とはむべもいひけり」(『古今六帖』秋立つ日)と詠まれているような「秋」を感じさせる「涼しい風」だったのである。このような當時の人々の好みに應じて、白樂天の原詩は改變され口ずさまれていったのではなからうかと。傾聴すべき一説である。

○「欲夜天」 この三字は、上句の「新秋地」と對になる。新と欲、地と天の對は、「槐花新雨地」柳影欲秋天」(白詩「答夢得聞蟬見寄」卷27、後集卷9)や、「漠漠聞苔新雨地、微微涼露欲秋天」(贈内」卷14)にも見える。

●二二番 白居易「七夕」「憶得少年長乞巧、竹竿頭上願絲多」

○本詩は、現存の『白氏文集』(宋版・馬本)や『全唐詩』『全唐詩逸』に未收の逸詩。作者名は底本(御物傳藤原行成筆

本)や『私注』『六注』、さらにはまた、大江維時『千載佳句』(金子彦二郎校本・松平文庫所藏本)時節部・七夕などに記される「白」に據り、詩題の「七夕」は『千載佳句』や前田侯爵家所藏傳二條爲氏筆本、岩瀬文庫所藏延慶本、『貞和本和漢朗詠集』などに據る。なお『六注』や『和漢朗詠集假名注』は「七月七日」と題するが、「七夕」のほうが優るようである。

金子彦二郎『平安時代文學と白氏文集―道眞の文學研究篇第二冊』(三〇六頁以下)は、本句を會昌四年(八四四)の五月、蘇州の南禪寺で筆寫を完了した「惠萼本『白氏文集』(六十七卷本)未掲載詩文の攝取例」としてとりあげ、この逸句は筆寫が完了した翌年(會昌五年五月)に成る『白氏文集』七十五卷本の大集が、後にわが國に舶載され、その末尾に付した『續後集』五卷(卷71く卷75)あたりからの攝取であらう、と推測する。それは、「卷七十一以後、卷七十五までの巻中に收録されてゐる詩文と推せられるものの引用が、可なり多數に、道眞の諸篇中に發見される」ためであり、本詩の「願絲」という語も、『菅家文章』卷五に收める「紀發詔(紀長谷雄)と同じ、御製の「七夕に秋穗を祈る」詩に和し奉るの作」に、「書に非ず劍に非ず 我が君明らかなり、千尺の願絲

一箇の情^{こころ}」と詠んだ原據詩にあたるとする。この指摘は、平安時代以降、わが國で最も廣く流布したテキストが、七十卷本（長慶集〔前集〕五十卷に後集二十卷を加えたもの）の『白氏文集』であつたことへの言及を缺いており、論旨の展開にやや飛躍が見られるが、現存する『白氏文集』七十一卷本の中で最も逸脱の激しい部分が、最後に完成した『續後集』五卷である實態を考えると、金子説は充分首肯できよう。『續後集』は會昌二年（八四二）の秋から同五年の夏までの詩文を主に收めている。これは、いいかえれば菅原道眞が惠壽將來本（六十七卷）「以後に渡來した樂天の全集にして且つ完本たる七十五卷本か、又たそれに近い全本を所持して居つたものの如く、しかして後輩たる大江維時・藤原公任・同基俊等も亦、それぞれ同系統・同内容の『白氏文集』を披閱してゐたやうに推斷される」（金子前掲書三〇七頁）ことを意味する。この金子説によれば、本條は白居易の最晩年七十一歳から七十四歳までの間に詠まれた逸詩とならう（七五歳没）。

ところで白居易には、同じく「七夕」と題する詩「煙霄微月澹長空、銀漢秋期萬古同。幾許歡情與離恨、年年并在此宵中」⁽⁴³⁾が残る。この詩は、清の汪立名が「泰興（江蘇省揚州）の季氏の手校宋本に出づ」と注する作品群の一首であり（『白香

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂付）（植木）

山詩集補遺」卷上）、花房英樹『白氏文集の批判的研究』（二七一頁）は、「恐らくは季振宜が諸書によつて拾遺したものであろう」という。季振宜は清初の著名な藏書家であり、明末の胡震亨撰『唐音統鑑』一〇三三卷とともに、『全唐詩』の底本となつた『唐詩』七二七卷の編者としても知られる。そして當該詩は、清の錢謙益・季振宜遞輯『全唐詩稿本』第四十二冊（聯經出版事業公司景印）三四二頁にも「集中不集」の一首として收められる。典據にやや不安も残るが、ほぼ白詩と認めてよい。

さらにはまた、平安後期（十二世紀前半）の藤原基俊撰『新撰朗詠集』「七夕」の部には、「白」の作とされる逸句「今宵織女渡天河、朧月微雲一似羅」が收められている（朱『箋校』外集卷中に「此詩載和漢朗詠」とするのは誤り）。この詩題は、最も古態を残すとされる鎌倉期書寫の梅澤本⁽⁴⁴⁾「新撰朗詠集」を始めとする主要な傳本のいづれにも缺けて見えないが、「白」の作とする點では全く異同がない。しかもこの上句は、すでに『大江千里集』（九世紀末に成る句題和歌）秋部第五歌にも見えている。金子彦二郎『平安時代文學と白氏文集——句題和歌・千載佳句篇——』第二 句題和歌（大江千里集）の研究」の「第六章 句題の原據たる白樂天詩句の研究」の條には、次のこ

とくいう、

他の部門に於ける樂天詩句記載例に見受けるやうに、此の前後の句題が悉く白樂天の詩句なる上に、句態が又頗る樂天の作らしく、且つ樂天との間に『劉白唱和集』の如き唱酬詩卷さへ存し、往々類似詩句も散見せしめられる詩友劉禹錫の詩にも、前記詩句と酷似せる「曾隨織女渡天河」、記得雲間第一歌」(『劉賓客集』卷二十五、「聽舊宮中樂人穆氏唱歌」)の如きも存してゐる等の諸事實から推斷して、これを白詩として算入した次第である。

と。引用される劉詩は七夕詩ではなく、天上界に見たてた(貞元年間の)宮廷のことを歌い、傍證としては充分ではないが、花房英樹『白氏文集の批判的研究』にも、金子説に據り(二七四頁)、作品番號三七八五を付す。さらにはまた、「隴月微雲一似羅」は、前掲「七夕」詩の「煙霄微月澹長空」の句境と類似する點も注意されてよい。「此の句、『白氏文集』にも『千載佳句』にも載せてない。白句ではないかもしれない」とする柿村重松『倭漢新撰朗詠集要解』(二七一頁)の疑惑は、ほぼ拂拭できよう。

筆者にとって最も興味深い點は、この逸句の韻字「河」と「羅」の二字が、今とりあげている本條(二二三番)の韻字

「多」とともに、下平聲・七歌韻(『廣韻』)に屬するという事實である。今日、『白氏文集』が最晩年の『續後集』五卷とその成立以降、死に到る一年半強の作品を除いて、保存率がきわめて良好で、散佚した詩文も拾遺作業の結果、三十首にも満たないらしい状況を考えれば、それぞれ別個に傳存する七夕の逸句は、じつは本來、「今宵織女渡天河、隴月微雲一似羅。憶得少年長乞巧、竹竿頭上願絲多」という「七夕」詩であつた可能性がきわめて高い。聲律的にも詩意の展開の面においても、一首の七言絶句として異和感なく鑑賞できよう。とすれば、白居易には二首の「七夕」詩が傳存し、いずれも『續後集』等に收められた最晩年(七十年代前半)の、履道里の自宅での作と臆測される。

○「憶得」 憶は通常、過去の事象と深くかわり、おぼえている、思い出す意。わが江戸時代の西成善「詩家(童習)用字格」卷四には、憶を「オモフト訓ス、古ハ意字ヲ用フ、臆・憶相通シ、ヨクオホヘテ居ルコトナリ。ソレヲ憶ヒ出スノ義ナリ」と解説する。本例も、平素潜在している記憶が、あるきつかけ(本詩の場合、後句の記す情景の目睹)を通して、不意によみがえってきたことを歌う。動詞の後に置かれた助字「得」は、獲得・實現・可能・結果などを表す俗語的用法

で、一〇三番に「遮得」として前出。本例は、動作がすでに完成したことを示すだろう。白詩の用例は、本條を除いて八例。「君が新たに呂君に贈る詩を見れば、憶ひ得たり 同年行樂の時を」(『和元九與呂二同宿話舊感贈』卷14)は、その一例である。

○〔少年長乞巧〕 唐代の七夕の代表的な行事は、唐の撰者未詳『雜抄』⁽⁵²⁾(敦煌寫本)「七月七日何謂」の原注に、「牽牛・織女を見て、女人は針を穿して巧を乞ふ」とあるように、年齢や身分に關係なく、上弦の月明のもとで小さな針穴に五色の絲(綵絲)を通して手藝(裁縫や機織り)の上達を祈る、戶外(庭先)での女性たちの祭りであり、男性、特に成年男子以上は排除されるのが通例⁽⁵³⁾である。七夕における男性の關心は、もっぱら節日の酒席や詩宴に置かれ、唐代、一日休暇となつた。こうした唐代の乞巧節の實態を考えると、「少年」という語が改めて問題になってくる。というのは、中國古典語としての「少年」は、一般に「老年」に對する若者・青年を指し、現代中國語や日本語の「少年」にあたるのは「童」とされるからである。このためであらうか、「此詩、古來ノ難義也」(『抄注』)とされ、詩中の少年を「七夕ニ願フ少女ノコトナリ」(『和漢朗詠集假名注』)とする説も生じている。⁽⁵⁵⁾

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(+) (植木)

乞巧節は確かに女性の祭りではあったが、じつは例外がある。それは兒童の場合であり、女の子はもちろん、男の子も乞巧の行事に参加した。杜甫の「牽牛織女」詩に、「世の人も亦た爾(織女是)の爲に、祈請して兒童を走らす」とあり、宋の蔡夢弼會箋『草堂詩箋』卷二七には、下句に對して「乞巧を謂ふなり」と注し、明の邵寶注・過棟箋『刻』杜少陵先生詩分類集註』卷五にも、「祈請は兒童皆乞巧するを謂ふなり」とある。七夕の祈願のために、子どもたちまでも駆けずり回る、というのである。また中唐の權德輿(七五九?—八一八)「七夕に諸孫と乞巧文を題すを見る」という五律に、

外孫爭乞巧、
內子共題文、

隱映花匳對、
參差綺席分

鵲橋臨片月、
河鼓掩輕雲

羨此嬰兒輩、
歡呼徹曙聞

とあるのも、嫁いだ娘の子どもたちが作者の内子と一緒に「乞巧文」(願いを書き記した文)を書いて祈り、夜明けまで騒ぐ光景である。なお乞巧文の具體例としては、中唐の沈亞之の「人の爲に乞巧文を撰す」(『全唐文』卷七三六)という作品に、

邯鄲人妓婦李容子、七夕祝織女、作穿針戲、取筭筭芙蓉、雜到席上、以望巧所降。

中國詩文論叢 第十六集

云々と記された後、歌妓らしい手藝・媚態・管弦の上達を願う内容を綴る。つまり乞巧文の内容は、當人の境遇に應じて異なることがわかる。

ところで清の仇兆鰲『杜詩詳註』卷十五、「牽牛織女」詩に引く三國・吳の周處撰『風土記』には、

七月七日夜、灑掃於庭、露施几筵、設酒脯時果、散香粉於筵上、以祀河鼓織女、言此二星辰當會。少年守夜者、咸懷私願。或云、見天漢中突突正白氣、有光曜五色、以此爲徵、便拜而乞願。

とある。これは歲時史的に言えば、「乞巧」の祈願に先立つて行われた「富を乞ふ」「壽を乞ふ」「子無ければ子を乞ふ」という個人的な三願（ただし祈れるのは、そのうちの二つ）を述べる條の前に置かれた箇所である。注意すべき點は、歷代の杜詩注釋書に引くもののみが、「夜を守る（寢ずにごす）者は、咸な私願を懷く」の前に、前掲のごとき「少年」の二字が挿入されている事實である。これは、少くとも歷代の杜詩注釋者たちの一部が、「祈請走兒童」と「少年守夜者、咸懷私願」とを關連づけて解釋してきたことを物語る。この意味で、唐末・五代の韓鄂撰『四時纂要』卷四、七月の條に、『風土記』に出づ」として、前掲の文章を少し改變しつつ、

七日乞巧。是夕、於家庭內設筵席、伺河鼓・織女二星、見天河中有突突白氣光明五色者、便拜、乞貴子（乞只乞一般、三年必應）、穿七孔針以求巧、乞聰慧。

と述べる末尾の傍點部が、特に注目されてくる。この箇所は、周處の『風土記』として傳わる逸文中に全く見えない部分であり、唐代の乞巧節の實態にもとづいて増補された記事らしい。つまり乞巧の内容が、舊來の三願を内包しつつ、手藝の上達、さらには「聰慧を乞ふ」までに擴大している。

これとの關連で興味深いのは、すでに『集注』や金子・江見『新釋』の七夕の條に引く北宋の都汴京（河南省開封）の繁昌記、孟元老撰『東京夢華錄』卷八、七夕の條に、庭先に組みたてられた乞巧樓に、「磨喝樂（人形）・木瓜・酒炙・筆硯・針線を鋪陳し、或いは兒童（男の子）は詩を裁り（てそなえ）、女郎（女の子）は巧（手仕事）を呈へ、香を焚いて列拜す（並んで拜禮する）、これを乞巧と謂ふ。婦女は月を望んで針を穿す」云々とある條である。北宋時代では、乞巧の行事の内容が、「婦女」の手藝の上達から男女の兒童の學問や手藝の上達を祈ることに重點が移っていることに氣づく。『歲時廣記』卷二七、「聰明を丐ふ」條に引く北宋の呂希哲『歲時雜記』に、

七夕、京師（汴京）諸小兒、各置筆硯紙墨于牽牛位前、書曰「某乞聰明」。諸女子致針綫箱笥於織女位前、書曰「某乞巧」。

とあるのも、ほぼ同じ内容である。この記事は、前掲の唐末・五代の『四時纂要』に見える「七孔針を穿して以て巧を求め、聰慧を乞ふ」とほぼ照應する。つまり「文筆・女藝の巧ならんことを二星に乞ふ」（野村八良注）⁽⁶⁴⁾ 兒童の「乞巧」の風習が、遅くとも唐末、おそらくは唐の半ば以降、士大夫の間に徐々に廣まっていたのではなからうか。白居易の逸句も、兒童の間に流布した新しい乞巧の風習にもとづいてこそ、詩意を適切に捉えうるのではなからうか。中村喬「牽牛織女私論および乞巧について」⁽⁶⁵⁾ の「男兒乞巧」の條で、「婦女が女工を織女星に乞うたのに對し、男兒は文墨の上達、聰（聴）明を牽牛星に乞うたことが、北宋時代に見られる」として、前掲の『東京夢華錄』や『歲時雜記』を引き、さらに次のごとくいう、

この男兒の乞巧が唐代にもすでにあったのか、その例を見出さないが、我が國の七夕乞巧において、筆硯を備え、梶の葉に歌をしるして二星に供えるのは、ここに源を發するであらう。

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂（植木）

と。他方、小南一郎『西王母と七夕傳承』⁽⁶⁶⁾「第二章 乞巧奠」の條にも、ほぼ同様にいう、

『東京夢華錄』では、七夕の祭壇に筆や硯がならべられ、また子供たちが詩を作って供えたとされてきた。これは、元來、この行事を通じて乞われるのがもっぱら女性たちの手仕事の「巧」であつたものが、宋代の都市生活の中で、詩や書の「巧」をも含むものへとその範圍を廣げたものであつて、書の上達を祈る現在の日本の七夕の風習も、こうした段階以降の中國の七夕の行事を取り入れたものであるにちがいない。

と。この見方は、洪淑荅『牛郎織女研究』⁽⁶⁷⁾の第五章（二五五頁）もほぼ同じである。

しかし、すでに述べたように、①唐代の乞巧節には兒童も參加している、②唐末・五代の『四時纂要』には、すでに「聰慧（聰明とは同意）を乞ふ」の句がある、の二點を踏まえて、本條の「憶得少年長乞巧、……」を考えれば、「元九に與ふる書」の中で五、六歳ごろから作詩の練習を始め、九歳で平仄や押韻などをおぼえたと述懐する白居易の（二十歳未満の）童年期に自分の家庭で體驗した「男兒乞巧」の貴重な具體例として捉えられそうである。柿村『考證』に「吾が少

中國詩文論叢 第十六集

年のをり行末かけて乞巧したことを思ひ出した⁽⁶⁸⁾りと譯され、大曾根譯に「七夕の宵に竹竿の頭上に藝の上達を願う五色の絲が澤山かけてあるのを見るにつけ、自分も少年時代に將來の願いごとををかけて乞巧^{きこう}を營んだことを思い出した」とあるのは、この意味ではほ穩當であらう。そしてより古く、『集注』が『東京夢華錄』（前引）を踏まえて、「乞巧とは、彼の兒童は詩を裁し、女郎は巧を呈すといへる、是れなり」とする解釋も妥當であらう。

ただ從來の解釋は、「少年」の語に對する吟味がややおろそかである。王維の「老將行」に「少年十五、二十時、步行奪取胡馬騎」と詠まれるごとく、少年には「童」⁽⁷⁰⁾（一般に八歳以上、十九歳以下）と重なる十數歳を指しうる用例があることは注意されてよい。そもそも「少」と對になる言葉は「老」である。徐中舒主編『漢語大字典』一（五六一頁）の「少 shǎo」の條に、「①年幼、年青、與老相對、『玉篇・小部』：少、幼也」②年輕人、與老相對とあるごとく、「少」と「老」は、いわば人生をおおまかに二分し相對化する思考に支えられており、それぞれの意味する範圍は、人により状況によって、かなりゆれ動く。この「少」を二字に伸ばした言葉が「少年」であり、白詩「逢舊」（卷15）の「應被傍人怪惆

悵、少年、離別老相逢」などは、このことを端的に物語る。筆者は、本例を弱冠（二十歳）未滿の「童」年期を指すと考えた。

○「長」 いつまでも一心に祈り続ける意であるとともに、唐代での近似音同聲調の「常」に通じて、「少年」時いつも祈ったの意を兼ねていよう。

○「竹竿」 國會圖書館本『和漢朗詠法』には、一説として「乞巧祭リヲハ、竹ノ棹ノ端ニ、五色ノ絲ヲ懸テ、四膳ヲ備テ祭ル也」とある。『抄注』にも「タナハタマツリニハ、ホソキタケノ、サホノハシニ、イロイロノイトヲ、カケナトスル也」という。

○「願絲」 書陵部本『朗詠抄』に「絲ヲ以テ竹竿ニカケテ立ルコトヲ、願絲ト云ヘリ」とあり、『集注』には「五色の絲を竿にかけて星に手向く」という。本来、桑蠶機織りの神、織女星に供薦された綵絲に由來するのであらう。『抄注』は、「ネカヒノココロヲ、イトニタトフル也」と解釋する。

ところでこの願絲は、中國における他の用例を見ないが、じつは願絲を指すと考えられる記事がある。柳宗元の「乞巧文」には、

柳子夜歸自外庭、有設祠者、饗餌馨香、蔬果交羅、挿竹

垂綏、剖瓜犬牙、且拜且祈。怪而問焉、女隸進曰「今茲秋孟七夕、天女之孫、將嬪於河鼓、邀而祠者、幸而與之巧、驅去蹇拙、手目開利、組紵縫製、將無滯於心焉。爲是禱也」。

とある。小南一郎『中國の神話と物語り—古小説史の展開—』(72)第一章「一牽牛織女と乞巧奠」に見える譯文を、参考にあげておきたい。

私が外庭から女たちのいる奥の庭に戻ったところ、祠りのそなえがなされて、膏粥や餌がかんばしく香り、蔬や果がつらなり、建てられた竹には綏(短冊の起源か)がかけられ、大小さまざまに割られた瓜が陳べられていた。人々は拜んだり祈ったりしている。私がいぶかしんで尋ねると、侍女の一人が進み出て言った、「きょうは秋のはじめの七夕の晩で、天女の孫娘が河鼓のところにお嫁入ります。この時をとらえてお祠りをしますと、特別の巧さを与え、拙さを追いはらってくれます。そうすると手と目とがよく利くようになり、機織りも裁縫も、心のままにすらすらと出来るようになります。だからお祈りをするのです」。

特に注目すべきところは、傍線部を付した「挿竹垂綏」で

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(+) (植木)

ある。じつはこの四字は、從來定説がない。たとえば挿竹を「古人、草を結び竹を折りて以てトふの義」(明の蔣之翘の輯注)、籤筒(籤竹入れ)に挿された竹片(章士釗『柳文指要』、體要之部)などとも解釋されるが、白氏の「竹竿頭上願絲多」、あるいはまた、菅原道眞の「千尺願絲一箇情」との關連では、「建てられた竹には綏(短冊の起源か)がかけられ」と譯す小南説が最も穩當のようである。范寅錚・徐日暉『柳宗元詩文選注』下には、「祭祀的卓子兩邊挿着挂有旗子的竹竿、旗子的纓總下垂」(祭壇の兩側に旗をかけた竹さおが挿さり、その旗の房狀の飾りが垂れ下がっている)と譯し、綏は綏と通じ、「旗子的纓總」をいうとする。朱玉麟・楊義ほか『柳河東全集』(76)上も同じ解釋であるが、やはり綏は飾りひも、垂れひもを意味しよう。いいかえれば、「竹を挿して綏を垂る」こそ、「竹竿頭上願絲多」の實態を描寫するのではなからうか。願絲の用例の乏しい現在、「乞巧文」中の「挿竹垂綏」の句が改めて注目されてくるわけである。ちなみに、細竹に短冊や細かく切った色紙を飾るのは、この願絲の名残りであらう。水原秋櫻子はか監修『日本大歲時記』(78)「願の絲」の條(關森勝夫執筆)に、この風習の起源に關する言及がないのは遺憾である。

○「七孔針」 大曾根注には、『荆楚歲時記』⁽⁷⁹⁾を引いて、「この夕、人家の婦女、綵縷を結び、七の孔を鍼に穿ち、」云々という。傍線部の原文は「穿七孔鍼」である（鍼^{はり}針、綵縷は色絲）。石川三佐男『玉燭寶典』⁽⁸⁰⁾（二三四頁）も、「七孔を針に穿ち」と讀む。これは、七夕にちなんだ一本に七つの孔をもつ特製の針を想定した解釋である。この讀みは、次の二つの論據によれば、妥當のようにも見える。①中村喬の前掲論文に引用することく、北宋の呂希哲『呂氏歲時記』⁽⁸¹⁾（『歲時廣記』卷26所引）の「今の人、月下に穿針す。〔其れ〕實に〔此の鍼〕用う可からざるなり。其の狀、扁（狹少）にして筓子の如く、七孔を爲す。特だ線を度さんと欲するのみ」（同書の讀み）とある。②平安末期の朝廷の恒例等を記した大江匡房『江家次第』⁽⁸²⁾卷八、七月「七日乞巧奠事」の條の「楸葉一枚を置く」の原注に、「挿金針七・銀針七、件針別有七孔、以五色絲、縫合貫之」とある。石村貞吉『有職故實』⁽⁸³⁾上の「年中行事」七月の條に、「楸の葉一枚を置き、金の針七つ、銀の針七つを挿し、その針ごとに七つの孔があり、五色の絲を縫り合せたものでその孔を貫いて置いた」とあるのは、この部分の譯と見なせよう。

しかし七孔針は、七夕にちなんだ七本一組の針を意味し、

筓子のごとく一本の針に七つの穴をもつものは、後（五代以降⁷⁹）に生じた變形であろう。小野勝年「正倉院の年中行事品」⁽⁸⁵⁾は、「七夕の行事品としては銀針、銅針、および鐵針が長短二種、合計七本あり、長針は銀・銅・鐵各一本で、長さ三四・九センチ、短針は銀・鐵各二本で、一九・五センチ」云々と述べた後、『荆楚歲時記』を訓讀して、次のごとくいう、

七孔は七孔ないし七本の意味で、從來一本の針に七つのあなをうがつと解釋したが、それは誤りである。

と。小南一郎『中國の神話と物語り』⁽⁸⁶⁾（二十頁）、同『西王母と七夕傳承』⁽⁸⁷⁾（五十頁）も七孔針を「七本の針」と譯し、七本一組の針（長針三本と短針四本）の三は陽を、四は陰を象徵するという。この解釋は、劉世儒『魏晉南北朝量詞研究』（中華書局、一九六五年）第二章「陪伴詞」の「第三節 專用的陪伴詞」の孔の條によつても、ほぼ裏づけられる。ただ孔をもつ物のみを数えるこの量詞は、實際にはあまり使用されず、同書も「貢白珠五千孔」（『魏志』東夷傳、白珠は通せる穴をもつ白い眞珠）の一例をあげるにすぎない。孔の量詞としての用例がきわめて少ないために、「七つの孔をもつ針」と誤解され、實際にそうした特製の針も後に作られたわけであらう。

う。⁸⁷これと類似する七夕の「九孔針」⁸⁸も、本来「九つの孔のあいた針」⁸⁹ではなく、九本一組の針と理解すべきであろう。

[注]

- (1) この官職については、前稿一九九番参照。
- (2) 「余春秋三十有二、始見二毛。」「文選」卷十三所收。
- (3) 朱金城「白居易交游續考」(同「白居易研究」所收)参照。
- (4) 「大唐六典」卷二六には、左庶子の職を「掌侍從贊相禮儀、駁正啓奏、監省封題」と記す。
- (5) 「大唐六典」卷二六には、右庶子の職を「掌侍從左右、獻納啓奏、宣傳令言」と記す。
- (6) 郭爲藩『中國人傳承的歲時』(十竹書屋、一九九〇年)一〇頁参照。
- (7) 『初學記』卷四、伏日の條にも、『歷忌釋』として見える。
- (8) 『漢書』卷二五上、郊祀志の顔師古注。
- (9) 『唐令拾遺』假寧令第二十九。
- (10) 『校異和漢朗詠集』参照。
- (11) 『百舌鳥國文』(大阪女子大學)六號(一九八六年)所收。
- (12) この解釋は、『私注』に引く李善注「潘岳、字安仁、美丈夫也。三十二、初拔二毛白髮」に據るか。もちろんこの部分、通行の『文選』李善注には見えない。
- (13) 興膳宏譯『弘法大師空海全集』第五卷(筑摩書房、一九八六年)三四五頁以下参照。

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(植木)

- (14) 高木達・植木久行「孝宣『李紳年譜』補訂(下②)」、『中國古典研究』四一號、一九九六年)参照。
- (15) 王拾遺『白居易傳』二三〇頁以下、花房英樹『白居易研究』七三頁参照。
- (16) 『太平廣記』卷一八七、祕書省の條に引く『兩京記』(唐の韋述『兩京新記』)参照。
- (17) 明德出版社刊、中國古典新書『白氏文集』。
- (18) 胡道靜『中國古代的類書』(中華書局、一九八二年)等參照。孫猛『郡齋讀書志校證』卷十四に、「北堂者、省中虞世南鈔書之所也」とある。
- (19) 唐詩小集、上海古籍出版社、一九九〇年。
- (20) 張永祿『唐都長安』(西北大學出版社、一九八七年)四四頁以下や、李令福「唐都長安的綠化」(『中國古都研究』山西人民出版社、一九九四年)等參照。
- (21) 『唐詩紀事』卷六七所收。
- (22) 唐の尉遲偓『中朝故事』に「天街兩畔槐樹、俗號爲槐衙、謂其成行列、如排衙也」とある。ちなみに、槐の枯れ木は、東郊を流れる瀟水や澧水にかかる橋の修復に用いられた。
- (23) 唐の陳允初「憶長安十二詠」(七月)に、「憶長安、七月時、槐花點散罽罍」とある(王仲鏞『唐詩紀事校箋』卷四七)。ちなみに、有名な唐代の諺「槐花黃、學子忙」(『南部新書』乙など)に對して、北宋末の阮閱『詩話總龜』前集卷二九に引く宋の陳正敏『遜齋閒覽』に、「謂槐之方花、乃進

中國詩文論叢 第十六集

士赴舉之時」とあるが、街路を黄色く埋める落花の時を想定すべきであらう。

- (24) 内閣文庫所藏室町期寫本の『私注』には「安」に作り、カノカウと傍訓する。

- (25) 春陽堂書店、一九七九年版。

- (26) 水上静夫『中國古代の植物學の研究』（角川書店、一九七七年）は、「中國特産のキリで、一般に支那桐と稱され、日本桐と比べると葉が著しく小さく、三角形をなしていて、軟毛を有する」という（四二七頁）。

- (27) 第一書房、一九七六年の復刻。

- (28) 文津出版社、一九九七年。

- (29) 岡不崩『古典草木雜考』は、白詩「雲居寺孤桐」（卷一）を梧桐、「和答詩十首」其三「答桐花」（卷二）を紫桐花とする。山本北山『孝經樓詩話』卷下、七十四の條も参照。

- (30) 通行の『淮南子』卷十六、説山訓には、「見一葉落、而知歲之將暮」とある。

- (31) 『全唐詩』卷一八九には、落を飛に作る。

- (32) 宋の羅願『爾雅翼』卷九、釋木、梧の條に、「葉春晚乃生、望秋輒稿」とある。宋の司馬光「梧桐」詩に、「初聞一葉落、知是九秋來」（『中華草木蟲魚文化』所引）とある。

- (33) 五代の李中「新秋有感」詩に、「門巷涼秋至、高梧一葉驚」とある。

- (34) 金子・江見『新釋』や、柳瀬喜代志「和漢朗詠集異文考」

参照。

- (35) 『國語國文』五五卷四號（六二〇號）、一九八六年所收。

- (36) 地の字は那波本や『文苑英華』卷三三〇（ただし詩題を「新蟬酬劉夢得見寄」に作る）に従う。宋版は「後」。

- (37) 「校異和漢朗詠集」による。

- (38) 『私注』は詩題を缺く。

- (39) 藝林舎、一九七八年刊。

- (40) 川口久雄譯注「菅家文章 菅家後集」（岩波書店）には、四〇四頁以下に収める。

- (41) 花房英樹『白氏文集の批判的研究』一一二頁以下参照。

- (42) 花房英樹「那波本と作品番號」（『白居易研究講座』第五卷所收）参照。同論文はまたいう、那波本に現存する卷七一は「卷内に致仕後のかなり多くの歌詩を留め、北宋刊本續後集の面影を辛じて傳えていた」と。

- (43) 『全唐詩』卷四六二所收。作品番號は三七一六。

- (44) 古典文庫第一九六冊。微を薇に誤る。

- (45) フォッグ美術館所藏（日本名跡叢刊、二玄社）、陽明文庫所藏（陽明叢書國書篇）、高野辰之編『日本歌謡集成』卷三所收本等。

- (46) 吳汝煜選注『劉禹錫選集』（齊魯書社、一九八九年）参照。ちなみに、この詩は大和二年（八二八）、五十七歳の作（十孝萱『劉禹錫年譜』）、もしくは同年から大和五年までの作（高志忠『劉禹錫詩文系年』）とされる。

- (47) 中唐の侯喜に「秋雲似羅賦」がある。
- (48) 目黒書店、一九三一年、一七一頁。
- (49) 王仁昉『刊謬補缺切韻』（周祖謨『唐五代韻書集存』所收）には、「卅三歌」韻に屬する。
- (50) 波多野太郎編『白話虛詞研究資料叢刊』（龍溪書舍、一九八〇年）所收。
- (51) 王三慶『敦煌類書』上（麗文文化事業股份有限公司、一九九三年）所收。
- (52) 中村喬の後引論文にいう、「乞巧には針孔に綵絲を通す『穿針』の行爲が伴うが、これはもとは桑蠶機織の神としての織女に、綵絲を供薦することから生じたものと思われる。また機織から針縫をも含む女工の神として、さらに針が供薦せられ、針縫の上達を願うようになり、その祈願の豫占として穿針の行爲が起った」と。
- (53) 程蕃・董乃斌『唐帝國的精神文明—民俗與文學—』（中國社會科學出版社、一九九六年）「歲時節日篇」の三參照。
- (54) 松浦友久『李白詩選』（岩波文庫、一九九七年）「少年行」の注。
- (55) 『六注』や『抄注』も同じ。祖詠「七夕」詩に「閨女求天女、更闌意未闌」とあり、盧綸「七夕詩」に「祥光若可求、閨女夜登樓」とある。
- (56) 鈴木虎雄・黒川洋一『杜詩』第六冊（岩波文庫）は牽牛・織女の二星とする。
- 『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(+)（植木）
- (57) 『玉燭寶典』七月孟秋の條には、ほぼ同文が『風土記』の注として見える。なお同文が『藝文類聚』卷四、七月七日の條に後漢の崔寔『四民月令』として引かれるが、『風土記』の誤り。
- (58) 祈は「祈請於」にも作る。守屋美都雄「周處風土記輯本」（同『中國古歲時記の研究—資料復元を中心として—』所收）參照。
- (59) たとえば『初學記』卷四、七月七日の條に引く『風土記』には、「乞富乞壽、無子乞子、唯得乞一、不得兼求。三年乃得言之、頗有受其祚者」とある。
- (60) 宋の王十朋集注『杜陵詩史』卷二六、『九家集注杜詩』卷十二、『草堂詩箋』卷二九、宋の徐居仁編、黃鶴補注『集千家註分類杜工部詩』卷十一、清の朱鶴齡『杜工部詩集』卷十三など。ただし錢謙益『杜詩錢注』卷六には、「少年」の二字がない。
- (61) 注(58)の輯本參照。
- (62) 山本書店影印本（守屋美都雄解題、一九六一年）や、繆啓愉『四時纂要校釋』（農業出版社、一九八一年）。
- (63) 壽の字を脱するか。
- (64) 有朋堂文庫『古代歌謠集』所收の『和漢朗詠集』の頭注。
- (65) 同『中國歲時史の研究』（朋友書店、一九九三年）所收。
- (66) 平凡社、一九九一年。
- (67) 臺灣學生書局、一九八八年。

中國詩文論叢 第十六集

- (68) 金子・江見『新釋』もほぼ同じ。
- (69) 川口譯に「少年少女たちが學問できるように、裁縫が上手になるようにと祈るにつけ」とあるのも、同じ考えにもとづく。大曾根注も同じ。
- (70) 孫壽璋『唐詩字詞大辭典』（華齡出版社、一九九三年）は、少年に「①人在十幾歲的階段」「②年輕人、青年」の兩意をあげる。
- (71) 宋蜀刻本を底本とした『柳宗元集』（中華書局、一九七九年）卷十八所收。
- (72) 岩波書店、一九八四年。
- (73) 和刻本『唐柳河東集』卷十八。
- (74) 中華書局、一九七一年。劉禹昌・熊禮匯譯注『唐宋八大家文章精華』（荊楚出版社、一九八七年）は、この章說に従い、「籤筒裏竹籤的繩須下垂」と譯す。
- (75) 湖南人民出版社、一九七九年。
- (76) 北京燕山出版社、一九九六年。
- (77) 願絲を「綏」に比定する考えは、すでに拙著『唐詩歲時記』（講談社學術文庫、二四五頁）に指摘した。
- (78) 座右版（講談社、一九八三年）。
- (79) 隋初の杜臺卿撰『玉燭寶典』七月孟秋には、『荊楚記』として引く。
- (80) 中國古典新書續編、明德出版社、一九八八年。
- (81) 『歲時雜記』の別稱。
- (82) 新訂増補故實叢書所收本。返り點は省略。
- (83) 講談社學術文庫（風義人校訂）。
- (84) 九八七年以後に成るとされる作者不詳『年中行事』（賀茂氏人保隆所傳）七月七日の「同夕、乞巧奠事」の條の原注に、「件針有七孔、以五色絲貫之」とある。
- (85) 『佛教藝術』一〇八號、毎日新聞社、一九七六年所收。
- (86) 唐代の用例も一例あげる。
- (87) 譚麟『荊楚歲時記譯注』（湖北人民出版社、一九八五年）は、七孔針を「指很細的針。針眼很小、必須傾注全身、才能穿過綫」というのみ。
- (88) 張滌華主編『全唐詩大辭典』第一卷（山西人民出版社、一九九二年）「七孔針」の條に、「按、九孔針爲七孔針之訛」とするが、にわかに従いがたい。
- (89) 川口久雄『菅家文章 菅家後集』四〇五頁の頭注。

《論稿募集のお知らせ》

『中國詩文論叢』第十七集の論稿を以下の要領で募集致します。

應募資格…本會會員の方に限ります。

應募締切…一九九八年七月三十一日必着。

提出先…東京都新宿區戸山1の24の1
早大文學部松浦研究室宛